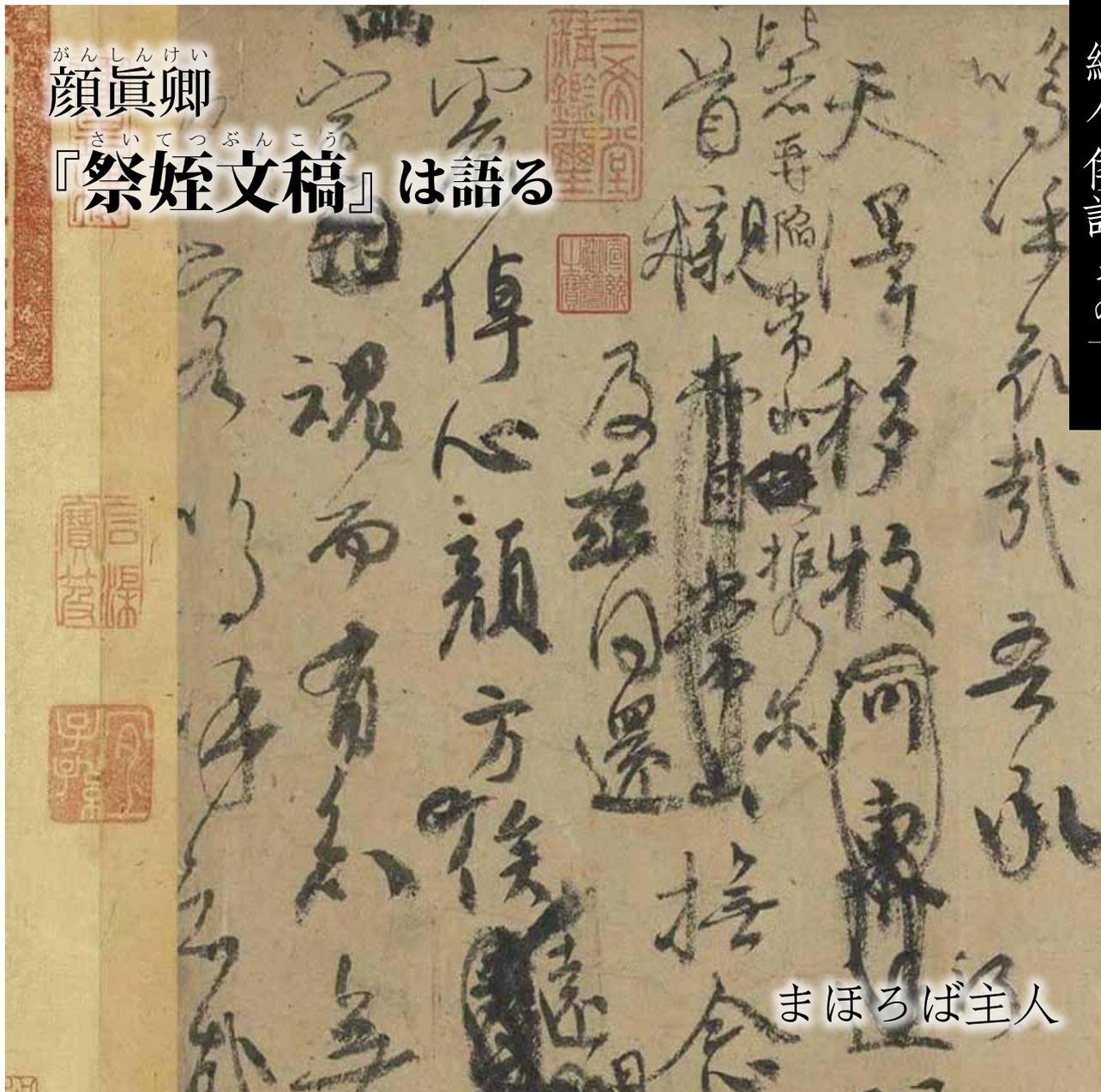


顔真卿

『祭姪文稿』は語る



まほろば主人



顔真卿〔709（景龍3）年～785（貞元元）年〕字は清臣。本貫は琅邪郡臨沂県。中国史上、屈指の忠臣、また当代随一の学者・芸術家であった。なお、姪は当時オイとメイ共に同字が使われ、季明は甥である。

顔真卿

唐代の政治家にして書家。

傾城の楊貴妃にて太宗は衰運、これに逆賊・

安禄山が跳梁跋扈した唐末。

忠臣・顔真卿、叛徒を迎え撃つこと果敢豪

猛、だが30名の親族を一挙に喪う。

父と伴に姪・顔季明、若くして壮絶非業な

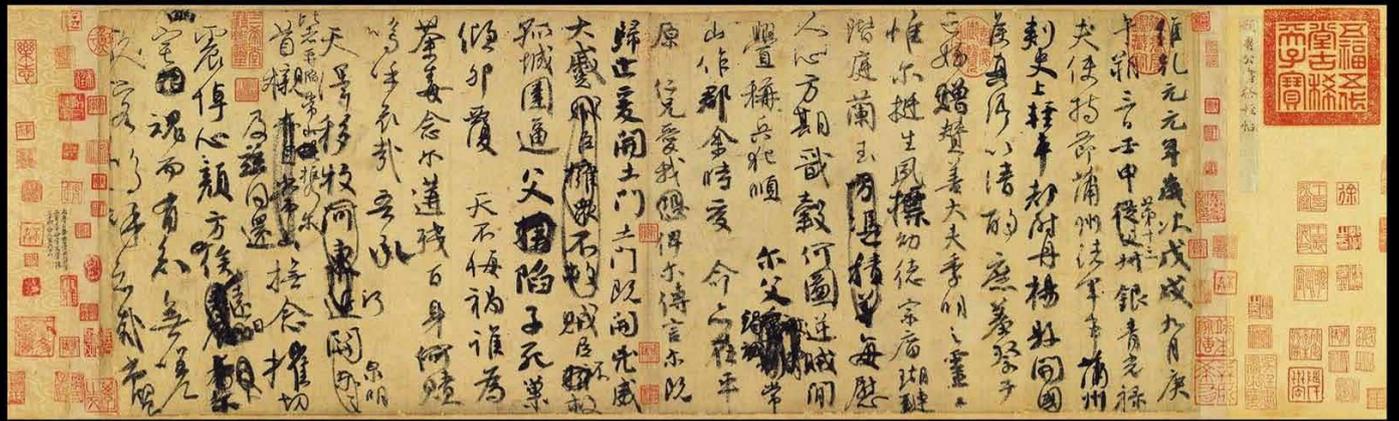
る死を遂げた。

ここに悲哀哀絶極まりなき断腸の祭文を捧

げて弔った。

その劇的書跡、名付けて『祭姪文稿』、本

邦初の公開となる。



顔真卿書『祭姪文稿』

## 信じられない長蛇の列

上野の国立博物館平成館にて開催。

タイトル「王羲之を超えた名筆」

出張時に知り、早朝から長蛇の列に飛び込む。

この書道愛好家しか知らぬはずの名蹟、今の時代に何故、かくも鑑賞者が居るのか。

——信じられない。

だが、前後に列する人波から中国語が多く囁かれる。

かの大戦の最中、蔣介石が北京より、台湾に持ち込んだという天下の至寶。

台湾国立故宮博物院でも3年に一度の開陳。

大陸の書家・好事家は初めて日本で鑑ることの出来る絶好の好機だったのだ。

天皇皇后両陛下、御観覧になるニュースも

手伝ってか、何重にも巡る列には感嘆の声。

記録によると10万人越え、80分待ちの渋滞行列。

——考えられない。

たった一枚のわずか30cmの書稿。

書に疎遠なる現代人を、天下各国の人々を、  
こも動かすほどの力が、どこから出てくる  
のか、どこに在るのか。

## 現代に可能か

現代人が、これほどの文を綴れるか、これ  
ほどの書が遺せるか。

どこにワープロ、誰がスマホにかかる感動  
を人に与え得るものか。

法帖（書の手本）を見て臨書しても、己の  
字に非ず、己の生き方に非ず、まざまざとそ  
れに気付く。写しは写し、コピーはコピーで  
あつて、創造には成り得なかつた。

書のための書、書家の書をもっとも忌み嫌  
つたのは、僧・良寛さんだつた。

## 艱難の半生

顔真卿は直言を疎まれ、妬まれ、左遷され、  
安祿山等の「安史の乱」以後、不遇の中、つ  
いに殺害された。

あの字は、激変の乱世から、生まれた  
悲憤慷慨の筆跡だつた。

人に見せようとも、展覧会で賞を取りたい

というのでもない。只々、その時の心情を  
赤裸々に吐露した一瞬の軌跡だつたのだ。  
その一瞬が1300年の時を超えて、  
人の胸に永遠の時を刻むのだ。

## 空海も王羲之も

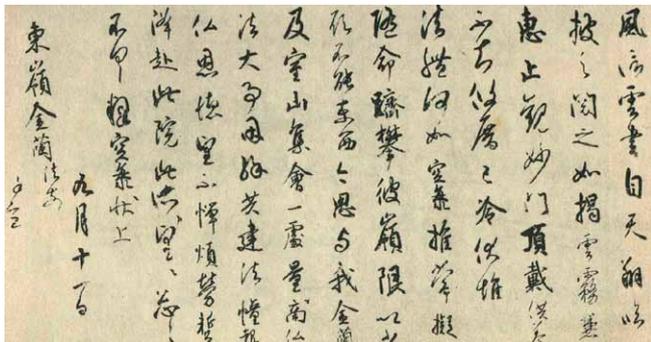
空海のあの『風信帖』もしかり。

最澄に宛てた一通の書信、手紙に過ぎな  
いのだ。

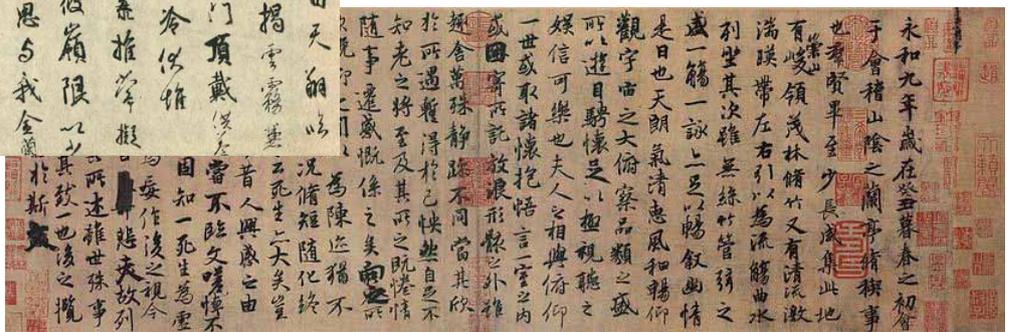
王羲之に傾倒したとはいえ、すでに自家  
薬籠中の物として自在無碍だつた。

古今の名蹟、その王羲之  
の『蘭亭之序』も、興に乗  
つてその日、曲水の宴を記  
録した草案だつた。幾度か  
書き直したが、二度とその  
氣を再現することはなか  
つたという。

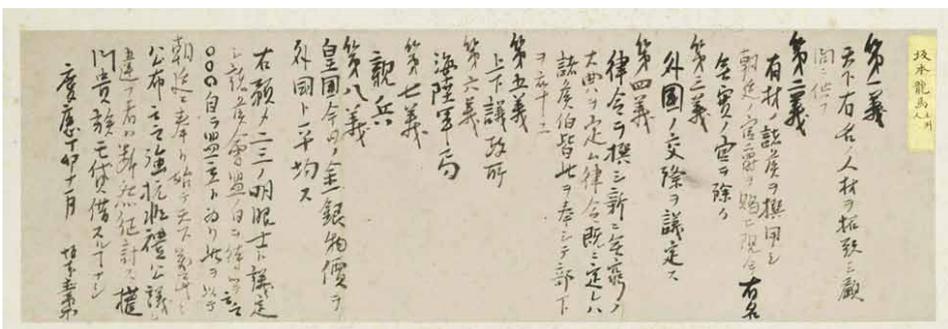
坂本龍馬の『船中八策』  
も、海援隊と船の中、天下  
再建の構想を闊達に誰に気  
兼ねなく綴つたからこそ生  
きている。それも、龍馬の  
メモ紙に過ぎなかつた。



空海書『弘法大師筆尺牘三通  
(風信帖)』



王羲之書『蘭亭之序』(八柱第三本)



坂本龍馬書『船中八策』

## 生きざまが筆跡に

一瞬一瞬の勝負ともいえる、その生きざま、その死にざま。

芸術という概念もない太古、用の美として日常の具に過ぎなかつた筆墨。

しかし、顔真卿の×<sup>バツ</sup>有り、直しあり、書き殴りの激情的筆跡が遺<sup>のこ</sup>つたのは、偶然ではない。

顔回の末裔、24歳で科挙の進士に受かり、当時文官の超エリートとして文筆を振るつた。

公文書を留め、辞書を作り、陸續として数々の歴史的碑文を遺した。「多宝塔碑」「顔勤礼碑」「麻姑仙壇記」「顔氏家廟碑」等々。

それが今日の手本、法帖として伝えられている。

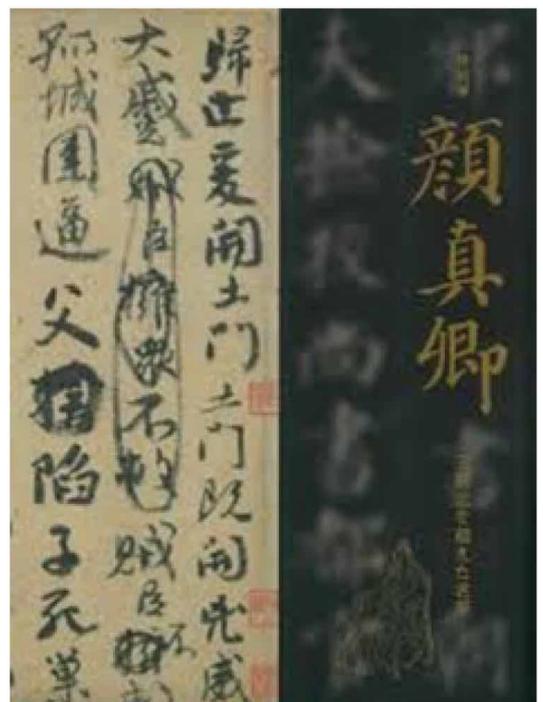
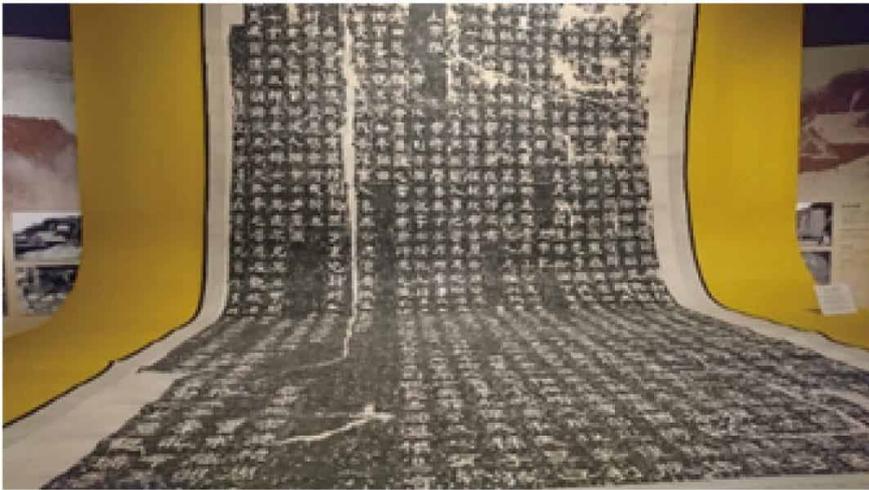
それは、骨があつたからこそ、草行にても芯が崩れないのだ。

基本基礎の日常的鍛錬の大切さ、必要性を物語る。

大事なことは、遺すために遺したのではない。

人生の一瞬一瞬を、命を懸けて走り抜いた古人の息遣いにして足跡なのだ。

大きな天下国家分け目の狭間<sup>はざま</sup>に、時の悪戯<sup>いたずら</sup>かも知れず、遺<sup>のこ</sup>るべくして残っただけのことだ。



若い頃、訳も分からず独習していた『祭姪文稿』。

今にして、こういう歴史的激動の人生があつたのかと感動している。

生きる！

その後にこそ、何事も

本当の足跡が付いて来ると信じられた。